

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 親鸞聖人の 鳥



イラスト 中川 学

くらやみ 「暗闇の中のひかり」

そのひとつに親鸞聖

いは儒教の經典である『論語』、そしてさまざま

世界宗教と呼ばれるものには、いくつもの共通点があります。そのひとつは、その宗教に詳しくなくても、あるいはその宗教を信じていなくても、聖典・經典を読めば、「おお、なるほどなあ！」と納得し、ときには救われることがあるというものです。

な仏教の經典があります。そのひとつに親鸞聖

「聖書」。あるリスト教の經典である『聖書』。あるリス

「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちも多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで

「明かりすら無い長い夜」そんな長い夜を過

「無明」から、ただ「明かりの無い長い夜」をイメージしたかもしれ

「和讃」というのは「平易な日本語（和語）で書かれたお言葉」です。親鸞聖人がご在世のころには文字を読めない人たちも多かったでしょう。そういう方々はこれを耳から聞いたはずで

「たいまつ」を言います。昔はよく停電になりま

「灯」の「灯」は「ともした火」をいい、「炬」は「たいまつ」を言います。昔はよく停電になりま

「無明長夜の灯炬」です。「灯炬」という言葉は「灯火」と聞いたかもしれ

「あ、これは智慧の眼をいうんだな」と気づくと思

「智慧の眼」は聞き逃してしまうかもしれ

「智慧の眼」は聞き逃してしまうかもしれ

さらに停電になって真つ暗になれば、より怖い。しかし、家々にはその時のためにろうそくが用意されていました。外は暴風雨、中は真つ暗。そんなときにろうそくが灯されるとほっと安心したものです。揺れる炎は心も暖かくしてくれました。それが「無明長夜の灯炬なり」です。

「明かりすら無い長い夜」そんな長い夜を過

「無明」から、ただ「明かりの無い長い夜」をイメージしたかもしれ

す。
智慧の眼は、ふだん私たちがものを見る時に使っている「肉眼」ではありません。その目を使わずに真実を見る智慧の眼が「智眼」です。

「目を使わずにものを見るなんて、そんなことできるわけがない。できたとしても、それは修行を積んだ人だけでしょ」

そう思うかもしれません。しかし、私たちは「目を使わずにものを見る」ということを普通にしています。

「夢」です。
夢を見るときに私たちは「目」を使いません。夢を見る時のような、目を使わずにものを見る能力、それをさらに一歩進めたのが「心眼」であり、もう一歩さらに進めたのが「智眼」です。

「智眼」や「心眼」を使うときに、実際の「目」は邪魔になることもあり

ます。私たちがものを見る時には、さまざまに先入観やかたよりがあるからです。

イエス・キリストは「まず自分の目から梁を取りのけるがよい」と言いました。

目の梁とは、真実のものを見るときに邪魔になる障害物です。邪念や偏見です。それらを利用して

真実の姿を見なさいというのがイエスの教えです。孔子は「視るには明を思へ」と言いました。

「明」という漢字の左側の「日」は、昔の漢字では窓の形でした。「明」とは、窓から月を見る形をあらわした文字です。

その窓がきれいな窓ならば月はその本来の姿を映します。しかし、曇った窓だったならば月も曇ります。

私たちは、何かを見るときに、自分の窓を通してしか見ることができません。そのことをよく思いなさいというのが孔子の教えです。

イエスも孔子も、自分の目の汚れを払って、ものごとを正しく見ることを勧めます。しかし、親鸞聖人は少し違います。

真実の姿を正しく見る「智慧の眼」なんて持っている人はまれです。私たちはみな持つていないでも、それが人間。そんなことは悲しまなくてもいいとおっしゃるのです。

▼優しい阿弥陀さま

そして最後に「生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」と読まれます。

阿弥陀さまが私たちは救ってくださるといいます。「本願」は、生死の大海での救いの船であり、そして救いの筏です。どんなに悪業が重くても、嘆くことはないよと教えます。

私はこのご和讃を読むと、いつも思い出すのがベッド・ミドラーという歌手が歌う『ローズ』という歌です。その歌の最後はこのような歌詞です。

夜がとても孤独で道がとても長いとき「愛」なんて幸運で

強い人だけのものだ
と思うでしょう
でもちよつと思ひ出して
冬に厳しく積る雪の
ずっと深いところに
横たわる種が
太陽の光を浴びて
春にはバラとして
花を咲かせることを

『ローズ』で歌う「太陽の光」が阿弥陀さまの本願です。

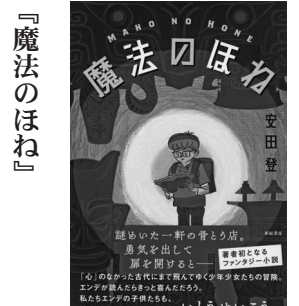
むかしの人は太陽を「おてんとう(天道)さま」と言いました。

「おてんとうさまに恥ずかしくない生き方をしなさい」などと言われました。

おてんとうさま(太陽)は、いい人の上には照るけれども、心がやましい人の上は照らしてくれないというような感じがあります。

しかし、阿弥陀さまは、私たちがどんなに罪深くても、また私たちの目がどんなに曇っていても、救ってくださるといふこと

です。いい人、悪い人の区別はないのです。



お便りがたくさん届いています。そうなんです。この本は、子どもたちに漢字を好きになつてもらいたくて書きました。

また「甲骨文を読みたい！」と思うようになってもらいたくて書きました。甲骨文字は現代の漢字のもとになっています。

世界の古代文字には「甲骨文字」「楔形文字」「ヒエログリフ」の三種

があります。この中で現代までつながっているのは甲骨文字だけ。せつかく漢字を読める国の子どもなので、甲骨文字を読み、そして「心」について考えてもらいたいと思いました。

本書の最初には、主人公たつきが授業中に掛け算九九がわからなくなつてしまい、同級生から笑われるシーンがあります

が、これは私の実体験です。私は小学校時代、掛け算九九をとうとう最後まで覚えられませんでした。

この夏休みに、読んでみてください！